

黎明期の羽曳が丘 ―宅地開発に至るまで―

羽曳が丘50年史における柏樹實氏による記述は昭和36年(1961年)頃以降のもので、それ以前の羽曳が丘については戦後開拓団の一員として活躍された的場一郎氏がまとめられたものがありますので、ここにその一部を紹介します。

的場氏は海軍兵学校在学中に終戦を迎えられ、昭和21年に大阪府が埴生野に開拓者を入植された際その一員として参加された。そこには四天王寺が経営する悲田院があり、四天王寺開拓農業組合と称する開拓団があった。

埴生野は痩せた山地であったため、昭和23年頃からは井戸を掘ったり鶏・豚・牛などを飼育してその糞尿、堆肥などで土地改良を行い、やがて一次産品の生産だけでなく農産加工も行うようになっていた。特に大根、菜種その他十字科植物を栽培し、それを圧搾して抽出した油は南河内近郊のミカン栽培農家などに飛ぶように売れた。また、桃源郷を夢見て桃の栽培などにも手を伸ばした。

しかし、この農業組合の事業は順風満帆ではなく、家畜の買い付け失敗、寄合い所帯の放漫経営などもあったりして当時の金で1000万円以上の負債を抱えていたようだ。

その後組合の土地は一旦国が買い上げ、組合員に再配分され、個々の農家として、再出発することになったが、負債は個人個人に按分されて残っていた。結局この負債は四天王寺が肩代わりすることとなり、各農家は四天王寺に土地を売却し、その場所が四天王寺大学の建設用地となった。

そして大阪府では昭和26年ごろから結核療養所を作る候補地を物色していたが、埴生村ではそれを誘致すべく誘致運動を展開した。的場氏も農業委員として誘致運動に参加されたようだ。誘致は成功し昭和27年12月には大阪府立結核療養所羽曳野病院が竣工した。

一方、大学用地に隣接する山林はダイワハウスが大和団地を創設し昭和36年ごろから宅地開発事業に乗り出した。それが今の羽曳が丘住宅地である。この地域は池が点在する山林であったが、乃木寺とその周辺だけは数軒の住居があり、羽曳野病院前から細い道が通っていたようだ。今の羽曳が丘4丁目付近は細い道が入り組んでいる箇所があるが、その名残である。